
白い黒と黒い白

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い黒と黒い白

【Zコード】

Z3589BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

ナスカは白魔法科に所属し、水魔法を専攻する学生ではあるが、実は黒魔法である火の魔法が得意だった。一方、黒魔法科に所属し、火魔法を専攻するも、実は白魔法である水魔法が得意な少女シェリンと補講教室で出会う事になった。第一回このライトノベルがすごい大賞落選作品を改修した作品。Pixivにも投稿。

第一節

「結局どこなんだよ、教室……」

廊下を歩きながらぼやく少年。

「『西館』一階の三番目の教室」ってどれだよ、どこからだよ……寝

昧すぎるんだよ」

悪態をつく彼が向かうのは、最終補習の教室。

彼はこの学園の一年生で、ナスカという名前だ。

ここに来てほぼ一年となる。

つまり一年生の終わりを迎えたわけだが、彼の一年生は、まだ終わりを迎えられはしなかった。

劣等生の彼は、学年末のテストで不合格となつたのだ。

そして、再テスト、再々テスト、再々々テストを次々と落第し、最終的にこの最終補習を受ける事になつたのだ。

「しかし、最終補習って何やるんだ。黒魔法科の連中と合同つて聞いたけど、自習か？」

教室を一つ一つ探して回る放課後。

やる気も何もなかつた。

ここは剣と魔法の世界。

大陸の西を領土とする、発展した文化を持つカドメ王国は、勇敢な騎士団で有名な国だ。

そして更に、高度な魔法研究が盛んであることでも有名である。

この国には白魔法と黒魔法を共同で研究する魔法研究施設がある。仲の悪い白魔法と黒魔法をまとめただけでも凄い事だが、更にここにはその研究成果を学ぶ下部組織、カードウ魔法学園があるのだ。ここでは魔法の素質ある若者たちが、その素質を伸ばすための教育を受けている。

学園はいくつかの学科に分かれているのだが、大きな学科で言えば白魔法科と黒魔法科の学生が大半となる。

この一つの違いはと言えば、実際は使う元素が違う程度だが、長い歴史が多いなる分断を作つてしまつていた。

白魔術は、教会を発祥とし、元々は人々を癒し、魔を祓うために作られ、教会で研究されてきた魔法で、光や水、土の元素を用いる。黒魔術は純粹な兵力として、特に中央の影響力の及びにくい地方の貴族などが研究させて作られてきた魔法で、火や雷、風の元素を用いる。

白魔法を使う教会側から、黒魔法は悪魔の術であると言われたことから、根深い対立があつた。

歴史の裏では、血で血を洗う抗争が繰り広げられてきた。それを先代の王が、結局同じく元素を利用する魔法であり、合同で研究した方が合理的である、との指摘を受け、王の命で合同の研究施設を作るに至つた。

もちろん完全に仲良くなつたわけではなく、王の命令で表面上仲良くなつただけの話ではあるが。

そしてその施設も既に長い期間を経て、合同研究で新たな事実も分かり、この学校も多くの魔法使いを輩出するようになつて來た。ナスカは、そんな学校の白魔術科でとことんまで落ちこぼれいる学生である。

「えつと、多分ここっぽいな？」

「どこから」という明確な基準のない「西館」階の三番目の教室と思われる教室を外から覗いてみる。

中では一人の女生徒が、辺りをきょろきょろしていた。

制服からして、黒魔法科の生徒だろう。

察するに、彼女の心はこんな感じなのだろうか。

（え？ だ、誰も来ないよ？ 本当にここでいいのかな？ 私、間違えた？ ど、どうしよう……）

少女の見た目は悪くない。

多少小柄だが、不安げな大きめの目が可愛く、穏やかそうな少女

で、とても火や雷を操つて敵を攻撃しそうには思えない。

いや、それが出来ないから、この落ちこぼれの教室にいるわけではあるが。

ともかく、仲間がいる事で多少安心したナスカは教室に入る事にした。

「ぐりえ！ フライングえめるフライシューファイナル！……」

実はナスカは変な事をして人を混乱させる事が多い生徒でもある。

「え？ きやーーーー！」

単に叫びながら教室に踏み込んでジャンプしただけだが、いきなりやられると大抵の人間は驚く。

ぱしゅん

ナスカの顔に水飛沫が当たる。

「……っ」

少女が咄嗟に出したのは、水魔法。

それには殺傷力はないが、押し黙る程度にはダメージを受けた。

「あ……！」ごめんなさい！」

少女の慌てる声。

ナスカは多少ふらついたが、立ち直った。

目の前の少女は、申し訳なさそうにナスカを見ていた。

「ふむ、以後気をつけたまえよ」

ナスカは無意味に気取つて見せた。

実際ナスカの無意味で唐突な行動が引き起こした事であり、少女にあまり非はないのだが。

「本当にごめんなさい」

だが、少女はとにかく謝った。

「まあ、それはそれとして」

ナスカはハンカチで顔を拭きながら言つ。

「最終補習の教室はここでいいんだよな？」

「うん、多分いいと思うし、私も最終補習なんだけど……」

少女は何か言いたげにナスカを見つめる。

「……？」

女の子に、意味ありげな上目づかいで見つめられると、多少の事では動じないナスカも少し困惑してしまつ。

ナスカは性格と成績こそ残念だが、顔は整つてあり、女生徒にはもてる方だ。

特に、生徒の9割が女生徒という白魔法科において、ナスカは「顔は格好いいけど、付き合つのは無理」「黙つていれば格好いいんだけどね」などと噂される注目の的なのだ。

だから、一部の将来聖職者になるうといふ少女たちの、限りない慈愛の瞳で見られたりする事には慣れているのだが、こういう視線には慣れていない。

「……なんだよ、俺の顔に目と鼻以外に何か付いているって言つのか？」

「えつと、口？」

「まあ、それは付いてるだけで飾りみたいなもんだ。使わないからな」

「はあ……」

多少茫然とした目に変化した少女。

「あの、そんなどうでもいい事より……」

案外的確にナスカを精神的に痛めつける少女。

「さ、さつきの事は、内緒にしておいて欲しいの」

「つむきながら、小さな声で言う少女。

「さつきの事つて、脳内の誰かと楽しげに歓談していた事か」

「そんなことしてないよー？」

「じゃあ、何だ」

「えつと、その……」

少女は再びうつむいて、辺りに人がいないかを確かめながら、小声で言つ。

「水魔法を使った事……」

真つ赤な顔で、消え入りそうな声で少女が言つ。

「ああ……」

ナスカは理解した。

魔法にはそれぞれ属性というものがあり、それを鍛えて行くものなのだ。

例えば、ナスカは水の魔法属性という事になつていて。

それを使い続ける事で、その魔法の属性が深まり、より大きな魔法が使えるようになる。

だが、別の属性の魔法を使うと、それが弱くなる。

だから、この学園では他の属性を使う事を推奨していない。

特に、黒魔法科は白魔法属性、白魔法科は黒魔法属性を使う事を校則で禁止している。

それを破ると、謹慎・停学等の罰を受ける事もあるのだ。

「別にいいが、魚心あれば水心と言つてだな、分かるよな？」

ナスカはよく知らないが、最近読んだ物語で悪徳権力者が言つていた台詞を言つてみた。

ちなみにその物語は、懇願をたてに悪徳権力者が女に体の関係を迫るものだが、正義の魔法使いに退治されてしまう。

「よ、よく分からぬけど、ハチミツ食べる？」

少女は自分のカバンの中からハチミツのビンを取り出す。

「いや、いらないというか、なんでそんなもん持ち歩いているんだ」

「……好きだから」

「だろうけど……まあ、別に言つ氣はないけどな」

ナスカは、不正を先生に言いつけるような人間ではない。

「でも……」

だが、少女は不安げにナスカを見上げる。

「あー、じゃあ、こうだ」

ナスカは、周囲に誰もいないことを確認すると、右手の指を真上に差し出す。

すると、そこから炎が湧き出し、徐々に大きく噴き出した。それは強い光を放つが、すぐに消えた。

「これでいいだろ？」

「……？ あ、ハーネースト？」

「まず、ハチミツから離れる」

ナスカは周囲を再度確認する。

「俺も黒魔法使ったから同じだつて事だよ」

「ああ、うん、分かつた……ありがとう」

自分のミスのために、自らも校則を破つて共有してくれたナスカへの純粋な謝意。

ナスカは言葉通りを受け取るのが照れくさいが、茶化す雰囲気でもなかつたので、話題を変えることにした。

「ところで、とっさに水魔法が出てくるような奴がどうして黒魔法科にいるんだよ。最初から白魔法科にいれば良かつたんじゃないかな？」

ナスカは単純な疑問を言つてみた。

魔法には属性があり、人はその属性を極めることで一つの魔法を身に付ける。

少女が水魔法が得意かどうかは不明だが、少なくとも好きな人間が、黒魔法科にいても、何の得にもならない。

黒魔法属性があればいいのだろうが、ここにいるといふ事はさつぱりなのだろう。

「…………」

少女は、言いにくそうに目をそらした。

「あー、込み入った事情があるなら別に言わなくてもいいけどね」「言つても、笑わない……？」

「は？」

少女が真剣な表情で訊く。

そのあまりの真剣さに、ナスカは少しだけ怯む。

「い……や、笑うことは、ないと思つけど……」

「じゃあ、言つよ……あのね」

少女が意を決して口を開く。

「入学申込書に、黒魔法と白魔法のどちらかに丸を付けるといふのが
あつたでしょ？ あれを間違えて、黒魔法の方に丸つけちゃ……」

「わはははははは！」

「爆笑！？ 笑わないうつて言つたのに！」

半泣きの少女。

「いや、でもな……ふつ……笑つなつて……あはははは……無理だ

う……」

「うわーん！」

少女がいよいよ本気泣きに移行しかけたので、ナスカは表情を戻す。

「あー、悪かつた。もう笑わない」

「……本当？」

「ああ。よくあるよな。ちょっとしたミスで、丸つけるの間違えて
全く正反対の……学科」はははははははははははは……」

「嘘つきー。うわーん！」

号泣が入った少女。

それはナスカが笑い飽きたるまで続いた。

「で、あなたこそこそどうなのよ」

まだ若干の鼻声の少女が、慄然とした表情で言つ。

「何がだよ」

「だから、あなたも火の魔法使つたでしょ。どうして白魔法科にい
るの？」

「あー……」

「あー……」

ナスカは頭をかく。

「俺のは別に笑える話じゃないんだが……」

「大丈夫、絶対に笑つてあげるからー。」

「いや、その宣言はどうだろ？』

先ほどの仕返しに笑う気満々の少女。

そうであればある程言いにくいや、少女の話を聞いた上、大笑いしてしまった手前、言わないわけにもいかない。

「俺もさ、確かにここに来るまでは火魔法が得意で、だからこの学園に来たんだ」

「あははははははー！ あっ、まだだつたー！」

「……眞面目に聞けとはさすがに言わないが、ちょっと黙つてくれ」

ナスカの突つ込みにさすがに黙る少女。

「けどさ、俺の親父は聖職者じゃないけど、敬虔な信者で白魔法の実力者なんだよ。また古い考え方の人でさ、黒魔法なんてものは絶対に許さないって、無理やり白魔法科に変えられたんだよ」

今までほとんど誰にも言つていない話を、何故か会つたばかりの少女に言ひ羽目になつた状況に若干の違和感を感じながら、話を続ける。

「で、ある程度火属性が出来上がりつていた俺には当然白魔法の属性に染まるわけもないからさ、こうして一年がかりでここまで落ちこぼれたんだよ」

黙り込む少女。

最早笑う氣すらないのだろう。

「どうだ、全然笑えない話だつただろ？」

「……する」

「は？」

「そんな、ちゃんとした理由、ずるいー」

少女は、突然猛烈に怒りだした。

「いや、そんなことを怒られてもだな」

「もつと、入学申込書で丸つける時に誰かと肘が当たつてずれたとかそんな理由じゃなきゃやだ！」

「そんな奴いないだろ。いたら指をして笑つてやる」

「うわーーん、また笑われる！」

「お前かよ！」

ナスカもさすがに突っ込み疲れて來た。

元々ボケ属性の強いナスカには突っ込みは慣れないポジションなのだ。

「もういい。あー疲れた……そう言えば先生来ないな。本当にここでいいのか？」

「だと思つけど、知らない」

「だろうな。……そう言えばさ、あー、名前知らないけど仮にゲルゲゲとしよう、なあゲルゲゲ」

「どうしてゲルゲゲ！？ 名前くらい聞いていいから！ 私はシェリンだよ」

少女は自分の胸を指して言つ。

「まあ、じゃあそれでいい。ところでさ、黒魔法科の……」

「せつかく名乗つたんだから呼んでよ！」

「面倒くさい奴だなあ、シェリンは」

「そんな呼び方は駄目！」

ナスカはいちいち面倒になつて來たので、下手に出る事にした。

「分かつたよ、シェリン。いい名前だな」

全くその気のない表情で言うナスカ。

「そ、そう？ ありがとう、えつと……ゲルゲゲ？」

「ナスカだ。それはいい。ちよつと黒魔法の教科書見せてくれないか？ 僕も白魔法の教科書見せるからさ」

ナスカは、カバンから自分の教科書を出してみせる。

「う、うん」

シェリンは多少戸惑いながらも、カバンから教科書を出してみる。

「じゃ、ちよつと見せてくれ」

ナスカがシェリンの教科書を手に取り開いてみる。シェリンもしじうがなく、ナスカの教科書を開いた。

「へえ……」

シェリンがとりあえず選んでいる属性は火だった。

その教科書は、ある程度の火魔法を体得している人間にとつて、とても分かりやすいものだった。

炎の增幅法、一点へのパワーの集中、空気の薄い場所での使用法など、火魔法の基礎が存分に書かれた分かりやすい教本となっていた。

そして、それはシェリンも同様のようだった。

ナスカが仮に選んだ水魔法が彼女にはとても理解しやすいものなのだろう。

二人は集中してそれを熟読した。

先ほどまでの騒ぎはなくなり、教室に静寂が訪れた。

どれだけの時間が流れただろう。

集中していた彼らには長時間という感覚がなかつたが、しばらくしてから、先生が教室に現れた。

「おお、やつぱりこっちにいたのか。全然来ないからどうしたもんかと思つてたんだよ」

適当な教室名を書いた先生は、やはり別の教室にいたようだ。

「んー、まあもう遅いし、お前らも自分で勉強してたようだし、もう合格でいいんじゃないか？ どうせ簡単な小テストするだけだからな。じゃ、お前らもう帰れよ」

言つだけ言つて、先生は帰つて行つた。

「何なんだ」

せつかく集中して読んでいたのに水を差されたナスカは、少しだけ気分を害していた。

「まあ……帰れと言われたから、そろそろ帰るか」

「うんうん」

シェリンはそう言いながらも本から目を離さなかつた。

「おい、ゲルゲゲ」

「うんうん」

「人に肘がぶつかって黒魔法科に行つたドジなシェリン」

「うんう……うわーん！」

やつと正気に戻つた。

「あんたなんて！　たつた今覚えたキュアで回復してあげるんだから！」

「落ち着け、そしてありがとう」

なんだか少しだけ回復したナスカは、シェリンの肩を掴んで落ちつかせる。

「！　う、うん……」

ナスカの顔を間近で見たシェリンは、少しだけ頬を染めて目をそらす。

「ま、今日はもう帰るわ」

「で、でも、もつちよつとだけ読みたい！」

「奇遇だな、俺もだ」

ナスカはシェリンの手から教科書を奪い、カバンにしまつ。

「ま、折角知り合つたんだから、また会おう。その時に教科書をまた見せ合えばいい」

「え、あ、うん……」

少しの戸惑いと、少しの嬉しさと、少しの希望。

そんな淡い感情とともに、シェリンはうなずいた。

「また、会いましょう」

黒魔法と白魔法の最低成績者の一人は、いつもして邂逅することとなつた。

第一節

「そういうわけなので、決められるなら、次の休みまでに決めるよう。それ以降はこちらで勝手に決めるからな」

困惑のざわめきが広がる教室。

だが、それも仕方がないだろつ。

白魔法科一年生の一クラス。

落第しかけたナスカもなんとかこのクラスに籍を置くことが出来た。

一年に上がったところで、特に変わらないいつまらない授業が続くのかと思いきや、二年から合同演習というものがあるようだ。

これは、実際に学校外に出て、魔法の実地訓練をしてくるものなのだが、グループを組んで行う。

これがなかなか難しく、大抵の生徒は自分でグループを組むことができない。

なぜなら、条件が厳しいからだ。

- ・おおよそ5人程度、4人から6人のグループを作る
- ・グループ人員の属性は全員別でなければならない
- ・最低一人は白魔法科および黒魔法科双方の人間がいなければならない

一見簡単なようだが、白魔法科と黒魔法科の間にはなんとなく溝があり、普段の接点はない。

元々の知り合いがいるならともかく、大抵は相手の科に友達はない。

そこには根深い問題があり、なかなか難しいのだ。

元々の対立の歴史なんて、今の学生には関係のないはずではある。だが、やはり歴史は歴史である。

先生の世代、先生の先生の世代の対立が、この世代へと遺伝していることも往々にある。

そもそも魔法使いというものは多くが自分の魔法自分の属性が一番だと思っているところがある。

その上、方向性が異なる魔法を使うとなると、もはや理解できない人種となるのだ。

ナスカのように、黒魔法の属性を持つのに白魔法科にいるような人間は、白魔法科の人間も黒魔法科の人間も大して変わらないことを知っているが、大抵の人間はそうではないのだ。

交流がないことによって、「嫌われているかも?」と思いつ込んでいる生徒が多く、それ故に「だったら、こちらも親しく出る必要はないよね」と勝手に思うことも多いのだ。

だが、実際には多くの属性があり、それらが相互協力することで大きなパフォーマンスを發揮することが出来る。

それは口で言つても理解がなかなか難しい、だからこそ合同演習なのだ。

チームを自分たちで決められる生徒はほとんどない。

だから、ほぼ全員先生が決めたチームで演習を行うことになる。そうなると、相手の科はもちろん、同じ科の友達とも同じチームになれないため、困りどころもあるのだ。

「うーん、まあでも、別に誰とでもいいしなあ

ナスカは基本的に人見知りしないため、誰とでもつまみやつてくれるのでも、チーム構成はどうでもよかつたりもする。「どうでもよくありませんわ」

そんなナスカのつぶやきに答える者がいた。

透き通るような白い肌と長く雑じり気のない金髪。折れそうな細い身体。

見た目も流れる血も、生粋のお嬢様。

「何でだよ、エメリイ」

「……まずは、そろそろその呼び方をやめていただけませんか?

私は枢機卿様からいただいた、エメリフィーという名前があるのです」

「長い上に格好悪い」

ナスカはあつさり言つ。

「枢機卿全否定！？…………私の名前ですし、かりそめにでも尊重していただけませんか？」

「いやでも、エメリイの方が可愛いからいいんじゃないか？」

ナスカが言う、特に深い考えのない言葉に、彼がエメリイと呼ぶ少女は一瞬で真っ赤になる。

元々の肌が白いだけにその辺かは一層分かりやすい。

「……ナ、ナスカ様がそうおっしゃるのなら仕方がありますね」

エメリイは顔を隠すためにナスカに背を向ける。

「で、何がどうでもよくないんだ？」

「……？　何のことですの？」

「いや、さつきどうでもよくない、とか言つて現れたじゃないか」

「あ、ああ、そうでしたわね」

エメリイが軽く息を吐く。

「先生にお任せすると、私とナスカ様が一緒のチームにならなくなるかも知れませんわよ。裏から先生に手を回す方法もありますが、ナスカ様はお怒りになりますでしょ？」

「んー、まあ、そうだろうな」

ナスカは軽く返事をする。

ナスカは基本的にいつも軽い性格ではあるが、一度エメリイに切られたことがある。

それは彼女が、金の力で教師を動かそうとした時だ。

ナスカは怒った上で、二度と話しかけるな、と言つた。

その時はエメリイが泣いて反省して謝つたことで仲は戻ったのだが、それ以降、それまでちょっとお高く止まっていた感のある彼女が少し接しやすくなつた。

更に、それまでも入学前からの知り合いで仲はよかつたのだが、

その事件以降、いつもナスカについてくるようになった。

簡単に言えば、これまでわがままが通つてきたお嬢様が叱られて、

ナスカが気になる存在になつたのだ。

「チームが違つてしまえば、ナスカ様のお世話が出来なくなりますわ」

エメリイが困つた様子で言つ。

「いや、別に世話なんて要らないぞ。まあ、どうしても困つたら、白魔法科の子は優しいから同じチームになつた子が助けてくれるだろうし」

「演習は黒魔法科の方も一緒ですよー。あの人たちは白魔法の悪いところを見つけては大声で笑うのですわよー！」

「いや……まあ、そういう奴もいるかもしれないけどさ」

見てきたかのように言つエメリイに、呆れ気味に言つナスカ。

「それに私はナスカ様のお父様に、ナスカ様をよろしくと頼まれたのです。その責務を全うできなくなりますわよ」

「いや、だから、それは親父の社交辞令みたいなもんだって」

エメリイの父は、上位の貴族であり、また敬虔な信者もある。

同様に信者であり、また白魔法使いとして名のあるナスカの父と親交が深い。

そして、ナスカの父はナスカを無理やり白魔法科に入れたことからやけにならないかと心配し、エメリイに頼んだところはある。

エメリイは純粋なお嬢様であることもあり、頼まれたことには責任を持つてしまうのだ。

「どうしてもつて言つなら、チーム作ればいいけど、知り合いいるのか？」

「黒魔法科になんか、知り合いなんていませんわ」

平然と言つエメリイに、知り合いいないのにどうして見て来たかのような黒魔法科の悪口が言えるんだよ、と突っ込みたくなつたが、言つても意味がないので言わなかつた。

「ナスカ様はお知り合い、いらっしゃらないんですの？」

「あー、んー、いないことはないけどなあ……」

ナスカはシェリンの顔を思い浮かべる。

「あいつはどうなんだろなあ……」

「お知り合いがいらっしゃいますのね。確かに黒魔法科は殿方も白魔法科よりも多いと聞きますし」

「いや、女だけどな」

ナスカがいふと、エメリイが傍目でも分かるほどに驚く。
「ナ、ナスカ様？ その方はどういう関係の方ですか？ 親しい人ですの？ か、可愛い方ですか？」

「どうしたエメリイ、とりあえず落ち着け」

「……は、はい。申し訳ありません……」

エメリイは大きな深呼吸をした。

「そ、それで、その方はどなたですか？」

「んー、シーリングっていつ、この前の最終補習で会った子なんだけ

ど」

「最終補習……ということは、黒魔法科最下位の方ですね」

エメリイは少しだけほつとする。

そんな人間なら自分が太刀打ちできる、と思つたのだろう。

「そんな方は私たちのチームには相応しくありませんわ。せめて足を引っ張らない方でないと」

「いや、俺も最下位なんだがな……」

「ナスカ様は私と一心同体です！ だからいいんですの！」

「そんなものになつた覚えはないが……ま、知つてちょっと話をしたつてだけだから、向こうもいきなりチームを組もうと言われても困ると思うな」

「そうですか……」

エメリイが複雑な顔をする。

黒魔法科の知り合いがいるならチームが組める。しかし、ナスカの知り合いで女生徒というところがあまり気に入らない。だから、これで良かったのか悪かったのか分からぬ。

「ま、チームを作りたいって言つなら、また考えよつ。他に何かで
きるかもしれない」

ナスカが立ちあがる。

「今日は帰ろう。校門まで送る」

「はい、ありがとうございます」

エメリイは少しだけ嬉しそうにそう言って、自席に荷物を取りに行く。

カードウ魔法学園は基本的に全寮制である。

殺傷力の高い事もある魔法使いを、不安定な育成中の状態で外に出せない、演習や夜間講習など夜間に及ぶ授業も多いことからの規則なのだが、あくまで原則だ。

貴族の子等はほとんど寮に入っていないし、特殊な種族の生徒は寮での集団生活を嫌い、やはり寮には入っていない。

エメリイはまさにその貴族の令嬢であり、毎日送り迎え付きで家に帰っている。

「お待たせいたしました」

帰る用意を持つて、戻つて来るエメリイ。

「じゃ、行くか」

「はいっ」

二人は教室を出る。

廊下は下校する生徒、話しかけている生徒が沢山いて賑やかだ。

「あ、ナスカくん、エメルフィーさん、さよなら」

「おう、明日」

「じきげんよう」

挨拶を交わしながら歩く廊下。

階段を下り、出入り口に向かつ一人。

そこは、色々な学年や科の生徒が入り混じる空間。

喧騒も大きいが知り合いも少ない。

「あ、いた！」

そんな中、聞いたことのある元気な声が響く。

一瞬だけの静寂と、視線の集中。

振り返るナスカが見たのは、こちらを指さす少女。

「シェリン？ もしかして俺に用か？」

「うん、そう！ えつと……ゲレゲレ？」

「……お前はどの科にいても落ちこぼれたと思うぞ？」

「そんなことないっ！ 忘れただけ！ えつと……なんだつた

？」

思い出そうと試みたものの結局思い出せないシェリン。

「俺は麗しのダンディだ」

「そう！ 麗しのダン……あれ？ 違う気がする…」

「よく気付いたな、結構頭がいいぞ」

「そ、そとかな……えへへへ……」

褒めてもいらないのに照れるシェリン。

「ナスカ様、こちらのユニークなお方はお知り合いでありますの？」

「あ、そうそう、ナスカ！」

エメリイの問いに、シェリンが割り込む。

「あー、まあ、知り合いのシェリンっていう劣等生だ」「ひどい！」

「で、こっちはエメリイだ」

「ごきげんよう」

「あ、こんにちは」

挨拶を交わす二人。

だが、ナスカはエメリイが少し不機嫌になつてている事が分かつている。

彼女は黒魔法科を良く思っていないからだ、とナスカは思った。

実際は、見知らぬ少女がナスカと仲がいい事を気に入らないのだが。

「あー、とりあえず一人とも悪い奴じゃないから……」

「そんなことより！」

これからエメリイを説得しようとしていたナスカの言葉を遮り、

シェリンが言つ。

「ねえねえ、合同演習でチーム組まない?」

「へ? ああ……」

「こっちでね、友達三人とチーム作つたんだけど、白魔法科の人が必要だつたから、入つてくれると嬉しいな。あ、エメリイさんも一緒に」

一方的に話すシェリン。

エメリイは少し呆気に取られている。

「んー、まあ別にいいぞ。こっちもチーム探してたし」

「ナスカ様!?」

「? 駄目か? サつき探してるつて言つてたから」

「いえ……駄目ではありませんが……」

エメリイが複雑な表情を見せる。

「? いいんだよな?」

「……ええ、構いませんわ……」

「ほんと!/? ジヤ、他の子呼んで来るね」

そう言うと、シェリンは走り去つて行つた。

「……ナスカ様、あの方とはどういづじ関係ですか?」

エメリイが少し不安げに訊く。

「言つただろ、最終補習の時に会つたんだよ」

「……それだけにしては、とても仲がよろしくありません?」

「そうか? まあ、話しやすい奴ではあるな」

ナスカはシェリンの去つた方向を見つめながら言つ。

エメリイは、何か言おうとしたが、シェリンが戻つて來るのが見えたため、言わなかつた。

「呼んで來たよ!」

嬉しそうに戻つて來るシェリン。

彼女が連れて來たのは黒魔法科の制服を來た二人の女生徒だつた。一人は黒い髪を左右で束ねた少女。

気の強そうな顔で、じつとこちらを睨んでいる。

もう一人は肩にかかるない程度の髪に知的な瞳、そして非常に小柄な身長の少女。

「あのね、こっちの人がエメリイさん、でこっちが……えっと、ゲルマン?」

「お前はなにか、俺を忘れる呪いでもかけられてるのか?」「違うよ! 覚えにくい名前なの!」

「いや、絶対違うと思う」

こんなやり取りの中でも、ちょっとしたピリピリ感が漂っている。「ま、こっちの紹介はこっちでやるから、そっちの紹介してくれ」「う、うん……あのね、この子がアールヴァンテ。アールって呼んでるの。雷属性なの」

シェリンは黒髪の少女を紹介する。

アールと呼ばれた少女は、挨拶もせず、ふん、とそっぽを向いた。「で、でね、この子が……」

「ボクはトイネルヴィ。長いからトイネって呼んでね。風の属性を専攻してるんだ。よろしくね」

シェリンが紹介する前に、小柄な少女は自ら名乗った。

「あ、あのね、トイネは成績は黒魔法科一番なのよ」

シェリンが負けずに紹介する。

「じゃあ、そっちも紹介してよ」

「ん、ああ、こっちが……たしかエメルフィーだつたつけ。長いからエメリイって呼んでる。光属性の魔法を使う」

「よろしくお願ひしますわ」

ナスカの紹介に、エメリイが頭を下げる。

「あ! あの技の人?」

突然シェリンがエメリイに尋ねる。

「? 何の事ですか?」

「あの、えーっと、確かフライングえめるフラッシュファイナル」

「……それはおそらく、ナスカ様が私の名前で遊んだだけですわ。私はそんな技なんて持つてません」

そう言いながら、エメリイはナスカを睨む。

「ま、そんな事はともかく。俺がナスカ。まあ、一応水属性つて事になってる。シェリンとは最終補習で会った」

ナスカは適当に自分の紹介を終えた。

「で、この五人でチームつて事で

「ちょっと待ちなさいよ

突然割つて入ったのは、先ほどからずっと黙つていた、黒髪のア

ール。

「あんた、最終補習受けるような成績最下位の役立たずなんですよ。なんでこんなのとチームを組まなきゃならないのよ」

アールはナスカを指さして言つ。

「あー、まあ言いたい事は分かる……」

「聞き捨てなりませんわね！」

ナスカがやんわり受け流そうとしたところ、エメリイが受けて立つてしまつた。

「ナスカ様を悪く言つ事は許しませんよ」

「いや、さつきお前、シェリンの事全く同じよう言つてたじゅ……」

「ナスカ様は黙つていてくださいまし！」

「…………！」

いつも淑やかなエメリイの大声に、ナスカは黙つてしまう。

「そもそも白魔法なんて金持ちが道楽でやつてる役立たずなのに。回復魔法が使えるからまあ、足手まといでも我慢してあげてもいいのに、それが使えないなら必要ないのよ」

アールは見た目通り気の強い少女で、やはり白魔法を嫌つていた。だが、そう言われて黙つているエメリイではない。

「白魔法は教会で研究されてきた由緒正しいのですわ。黒魔法こそ田舎貴族の道楽にお恵みいただいて生きながらえて来たのではありませんの？」

「何よ！」「

「何ですの！」

エメリイとアールが一触即発の状態で対峙している。

「こんなところで魔法でも使われたら停学や退学にすりなりかねない。」

しそうがないので、ナスカは仲裁に入る事にした。

「まあまあ、ここはワシの顔に免じて引いてはぐださらんか」

「何者よあんた！」

「ナスカ様はお黙りくださいまし！」

矛先がナスカに変わっただけだった。

第二節

「この国は、騎士で有名な国であり、昔から騎士団入りを希望する少年は多かった。

だから、この学園に来て魔法を学ぼうとする学生は、その残り、つまり女子学生のほうが多くなる傾向にあった。

ただ、近年では魔法が高度化し、それを学ぼうとする男子学生も増え、また、女性騎士も増える傾向にあり、男女比は平準化されつつあった。

だが、彼らの世代になって、とある事情で急激に騎士団を志願する少年が増え、魔法を学ぼうとする学生が激減してしまったのである。

現在、この学園は男子生徒よりも女子生徒が圧倒的に多い。

だから、チームを組めば、男子一人女子四人という構成は普通にあることでもある。

だが、そんな一般論は今のナスカには関係なかった。

「えー……とりあえず落ち着いていただき誠にありがとうございました」

ナスカは深々と礼をしてみる。

往来の喧嘩で騒ぎになりそうだったので、必死で近くの教室に連れ込み、座らせて、やつと冷静になつたところだ。

ナスカは女同士の喧嘩の仲裁なんてやつた事もないが、シェリンはおろおろするだけであり、トイネは静観しているだけなので、彼が動かなければならなかつた。

「まあ、色々あるとは思いますが、チームになるわけですし、みんなで仲良く……」

「嫌よ」

限りなくへりくだつて話していたナスカの話をあつさり断つたのはアール。

「あんたは駄目だし、あの女も嫌い。あんたたちとチームを組む気はないわ」

「何ですって！？」

「あーもう、落ち着けって！」

ちょっととつつき方を間違えるとすぐに再燃してしまつ。

さすがに楽天的なナスカも頭が痛くなつてきた。

もうしばらく放置して、好きに喧嘩させて疲れるのを待とうか、と投げやりに思い始めた。

「ねえねえ、あのね」

そんなナスカにこつそりと話しかけて来るのは、隣に座っていたシェリン。

「アールを悪く思わないでね。あの子悪い子じゃないの」

「うーん、あそこまで攻撃的だと、さすがに難しいなあ。でもそれはエメリイも同じか……」

ナスカは喧嘩を続ける一人を見めながら答える。

「で、でもね、成績の悪い私をかばってくれるし、助けてくれるし、色々教えてくれるの。本当は優しい子なんだよ！」

「へえ」

ナスカは少しだけアールを見直す。

要するにエメリイと同じなんだろう。

お互に役に立たない人間をサポートしていく、だからチームを組みたくて、そのチームは役に立たない人間がいるから、それ以外の人間を最高にしたいのだろう。

そうなると話が少し見えて来た。

後は、黙つている小さな少女がどういうスタンスか、だらうか。

「ところで」

ナスカが少し大きめの声を出すと、喧嘩していた一人も振り返る。

「トイネ、だつたつけ？ お前はどう思つてるんだ？」

「え？ ボク？ 何が？」

いきなり話を振られて驚くトイネ。

「いや、チームの構成とか白魔法と黒魔法とかの話」

「うーん、チーム構成はやつてみないと分からぬよな。学校の授業だけじゃ分からぬから演習があるんだし。一年生の成績が悪いから演習が出来ないとも限らないし逆もそうだし」

トイネがあつさりと二人の喧嘩の原因を否定したので、二人は反論も出来なくなつた。

「白魔法と黒魔法は、分けてることそれ自体馬鹿馬鹿しいと思つてゐるよ。同じように元素を使う魔法だからね。単にそれを研究して来た団体と歴史が違つてだけで、今も分かれてるつていうのも変な話だよ。

逆にお互いの歴史を研究すれば新たな事実が出てくるかもしだいのに。

今活躍してる魔法使いたちが完全に分かれていて、結局その弟子たちが研究施設にて、だから反目しあうんだよね。

外の世界の分断が、研究施設の派閥を生んで、それがこの学園の科を生んで、お互いの科が疎遠になつてしまつのも変だよね。じういう構造は内部からじや変えられない。

でも、外の魔法使いの世界はもつとひどいから、外部からも難しい。

かと言つて権力のある王様は魔法の事情に疎いからなかなか難しいんだよね」

「……うん」

ナスカはとりあえずそう返事した。

他のみんなも同じ気持ちだろう。

喧嘩をしていた二人も、そんな氣すらなくなつて呆気に取られてゐる。

「トイネの言いたい事は分かった」

とりあえず、白魔法と黒魔法の反目を馬鹿馬鹿しいと思つている事は分かつた。

だつたら、説得すべきは喧嘩している一人だけだ。

「俺も、白魔法と黒魔法は同じ原理だし大して変わらないと思つて
る、シェリンは違ひが分かるか？」

「え？　え？　違ひ？　何か違うの？」

シェリンはナスカが思つた通りの反応をする。

「うん。まあ、違いを考えると、そんなにないと思う。でも、いきなりそれを納得して考えを変える、と言つても難しいだろう。トイネも言つたけど、大の大人たちからそれが出来ないんだからな」

ナスカは少し息を大きめの呼吸をする。

「ここからが重要なところだ。

「でも、とりあえずは嫌な奴、役に立たない奴でいいから、一緒にやつてみるのは大事だと思う。実際やつてみてもやつぱりそう思うなら、その考えを変える必要がない。でも、それでやつぱりそうでないと分かつたら、考えを変えればいいと思うんだ」

ナスカが慎重に言葉を選んで言つと、教室は一瞬しん、と静まる。「で、ですがナスカ様……」

「エメリイ、お前はいつもは穏やかで優しい奴だろ？　ちょっと喧嘩売られただけで、そんなに取り乱したりしなくともいいんじゃないいか？」

「……申し訳ありません」

エメリイは、しゅん、とうな垂れる。

「俺の事を馬鹿にされたのが取り乱した原因だし、お前が優しいのは十分わかってるし、これまで助けてくれた事をありがたいと思つてる。だから、これは俺のワガママだけど、いつも優しいお前でいて欲しいんだ」

ナスカが言葉を選びながら言つと、エメリイは顔を上げ、徐々に顔が赤くなつたかと思うと、再び下を向いた。

「はい……分かりましたわ……」

エメリイは消え入りそうな声で言つた。

「さて、アール

「な、何よ」

ナスカがアールに振ると、アールは少しだけ身構える。

彼女はトイネの言葉で戦意を失つており、また、喧嘩相手のエメリイが大人しくなってしまった事から、今更喧嘩をする気もないが、かと言つていきなり勢いを失うのも何となくできずに、自分でも困つている。

「多分、だけど、お前がチームを組む目的って、シェリンなんじやないのか？」

「え？ そうなの！？」

理解もしていなかつた当事者が驚く。

アールは一瞬困った顔をして、シェリンを見、ナスカを見て開き直る。

「そうよ。それがどうしたのよ」

アールはそっぽを向きながら答える。

「やつぱりそなんだな。シェリンをサポートするためにチームを自分で作りたい。そうなると、シェリン以外に足を引っ張りそうな俺は駄目、黒魔法を馬鹿にするような事を言つエメリイもシェリンと一緒にさせたくない。シェリンの失敗を馬鹿にするかもしれないからな」

「…………」「…………」

アールは何も言わない。

それは肯定を意味するものなのだろう。

「お互い不満のあるメンバーってのもあると思う。けど、お互いチームを作りたいて目的は共通だとと思う。多分、他にチームを組めるメンバーをお互い知らないんじゃないかな？」

誰も何も言わない。

その事は十分過ぎるほど分かつてゐるからだ。

「とりあえず、その利害のためだけでも手を組まないか？」 喧嘩でチームの足を引っ張らなかつたら、喧嘩したつていいし、文句言つたつていい。うまく行くかどうかとか、そんな事はやってみないと分からないし、それでも先生にチームを組んでもらうより遙かにマ

シだと思つんだ」

ナスカはゆつくりと、それぞれの田を見ながら説得する。

静寂。

戸惑い。

ナスカが少し不安に思つた頃。

「ボクはいいよ。ナスカくんつて面白そうだしね」

トイネがにつこり笑つて言つ。

「わ、私も！ チーム組みたい！」

ショリンがそれに続く。

「……ナスカ様がそうおつしゃるのなら……」

エメリイも賛成してくれる。

これで四人がチームを組む事に賛成した。

残りの一人も賛成せざるを得ない状況だろ？

「分かつたわよ！ ショリンがいって言つならいいわよ。でも、

言いたい事は言つわよ！ いいわね！」

少し怒つたように言つアール。

「ああ、それがチームつてもんだね？」

ナスカが言つと、アールはやはり不機嫌そうにしていたが、それ以上何も言わなかつた。

「じゃ、これで決まりだね」

「ああ。じゃ、今日はもう終わりにして、明日にでもチームの提出をしよう。昼休みは空いてるか？」

「うん、空いてるよね？」

ショリンが一人に確認し、一人が肯定する。

「じゃ、明日の昼に話し合つて提出しよう。とりあえず食堂で」

「分かつた。あー、じゃあ、一緒にご飯食べよ？ チームなんだし！」

ショリンがいきなり提案する。

チームを組むことをそれぞれが了承したとはいえ、微妙な空気が漂つている中、ショリンの空氣の読めない提案は、均衡を崩す恐れ

漂つている中、ショリンの空氣の読めない提案は、均衡を崩す恐れ

すらあつた。

「俺はいいけど……どうかな？」

ナスカはエメリイをちらりと見る。

「……ナスカ様がいいのなら構いませんわ」

少しだけ嫌そうな顔をしているが、肯定 자체はした。

「あと、そつちのアールも……」

「いいわよ、好きにすれば？」

「トイネもいい？ ジャア、明日はみんなでご飯を食べましょー！」

シェリンは一人無邪気にそう言つた。

ナスカは、今日の喧嘩の続きがないように祈るばかりだった。

「今日は、本当に申し訳ありませんでしたわ……」

背後からの声に、ナスカは振り返る。

チーム結成から数分後、黒魔法科の彼女らと別れて、ナスカは最初の目的通り、エメリイを送りに校門に向かっている。

「？ 何がだ？」

「先ほどは取り乱してしまい、喧嘩をしてしまいましたし、ナスカ様にも失礼なことを言つてしましました……」

「ああ、まあ、確かにちょっと困つたけどな」

ナスカが言うと、エメリイは申し訳なさそうにうつむく。

「でも、うぬぼれるなよ。あの程度、俺がお前を普段困らせているレベルの足元にも及ばない。もつと精進するんだ」

「は、はあ……え？ あ、いえ、これ以上困らせるわけには……」

「いいんじゃないのか？ 女ってのは、少し男を困らせた方が魅力的らしいぞ？」

ナスカが言う。

深い考えのない、軽い言葉だったが、エメリイはそれを重く受け止めた。

「……ナスカ様は、困らせる女性の方がお好きなのですか？」

「困るのはやだなあ、面倒くさいし」

「ですか　ですよね」

「でもまあ　」

ナスカはやはり深い意味もなく、軽い気持ちで言つ。

「エメリイなら、仕方がないよな」

「……………!?」

エメリイはやはり、それを必要以上に受け止める。

「エメリイにはずいぶん世話になつてゐるし、かなり困らせてると思
うからなあ。多少困らされても仕方がない」

「いえつ、あのつ、わたくしはナスカ様をお世話する立場として…

…」

顔を真つ赤にしてうろたえるエメリイ。

「それに、今回も俺の事を馬鹿にされたから怒つたんだしな。本当にエメリイには頭が上がらないな」

「……………当然のことを、したまでですわ」

エメリイはこれ以上なくうつむいて赤面を隠し、つぶやくような小さな声で言つ。

「ま、そんなわけだから気にするな。怒つたエメリイも可愛かった
しな」

「……………」

エメリイは更に顔を真つ赤にすると思ひきや、大きなため息をついた。

「そう言えば、ナスカ様はそういう方でしたわね……」

「？　どんな奴だ、俺？」

ナスカは不思議そうに聞く。

エメリイは、もう一度大きなため息をつく。

大抵の人間は思春期を過ぎると、異性に気を使うようになる。

不用意な発言をしたりしないように言葉を選んだり、変な意味に取られないように考えながら話すようになり、結果慣れるまではぎ

「ちなくなるものだ。」

だが、ナスカにはそのようなものはない。

不用意な発言も誤解されそうな発言も平氣でして、だから変な事も沢山言つが、どう聞いても愛を囁いているとしか思えない事も平氣で言ひ。

白魔法科ではそれでしょっちゅう女生徒を赤面させている。

普段言つている事が変な事ばかりであるため、そのギャップから本当に恋をしてしまいそうになる女生徒も多少いない事もない。

だから、エメリイはナスカが思つていてる以上に困らされている。「何でもありませんわ。ナスカ様は、優しくて、格好よろしくて、背も高くて、大好きですっ！」

「な、何だよいきなり？」

「いつもの仕返しですわ」

そういうとエメリイは足早に校門を抜けて行く。その向こうには執事と思しき男性が待っていた。ナスカはその様子を半ば茫然と見つめていた。

「何だつたんだ……」

つぶやきながらナスカは校門を背にした。

「あ、あの……」

校内に戻ろうとしていた彼に呼びかける声。

「ショリンか。迷つたのか？ 寮はこっちじゃないぞ？」

「違うよつ。寮はそんなに迷わないもん」

「少しは迷つのか。まあいい、どうしたんだ？ あの一人はどうした？」

「あの一人はもう寮に戻つたと思うよ……あのね……」

ショリンは、うつむいてもじもじし始めた。

「トイしなら俺に言わなくとも行けばいいぞ？」

「違うつ！ もうきいつけばいい出した！」

「そんな報告はいらん。用件を言え」

「だ、だからね、お願いなんだけど、言わないでってこと」「お前がトイレでどれだけ出したかなんて、いちいち言つわけがないだろ？」「違うの？－ それは言つてもいいの？－」

「それは女子としてどうだらう？」

「あ、あのね……私が、本当は白魔法科に行きたかった事、言わないで」

ショリンに懇願される。

彼女にお願いされるのは、これで三回目だ。

「ま、あのアールって奴は白魔法嫌いつぽいしな。そんな事がばれたら、さすがに縁を切られる事はないだらうけど、多少ぎこちなくなるだらうしな」

「う、うん……」

「ま、言わないし言つつもりもない……いや、ハチミツはいらないえ？ いいの？」

ショリンは出しかけたハチミツをしまつ。

「俺だつてもうチームメートだからな。団結が崩れるような事はない」

「うん、ありがとう」

ショリンはにっこり笑う。

「じゃ、寮に帰るか」

「あつ、ちょっとだけ教科書見せてよ。一年生の－」

「あー、じゃ、一旦どこかの教室に行くか」

「うんつ！－」

元気よく答えるショリン。

夕暮近い校舎。

一人の影がその大きな影へと消えて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589ba/>

白い黒と黒い白

2012年1月10日22時46分発行